

## 近世演劇における「キリシタン」と日本意識

(要旨)

加藤 敦子\*

近世演劇に「キリシタン」が登場する背景には、近世初頭の東アジア国際情勢と日本型華夷秩序の成立がある。すなわち、(a)明を中心とする銀の流通による大内・尼子・毛利ら戦国大名の勢力拡大、(b)華夷思想を揺るがす辺境軍事勢力の進出、(c)ポルトガル・スペインなどの東アジア進出による鉄砲・キリスト教の伝来、(d)豊臣秀吉の朝鮮侵略、(e)徳川家康による朱印船制度の創設とその終了、(f)キリスト教弾圧と貿易・外交統制、(g)明清交替、(h)海禁政策と日本型華夷秩序の成立である(注1)。

キリスト教の伝来に対して、日本国内の宗教的既存勢力である仏教と儒教の側から、耶蘇教(キリスト教)排撃を目的とする宗論が盛んになり、林羅山「排耶蘇」、鈴木正三「破吉利支丹」などが刊行された。

そうした流れの中で、宣教師の来日から島原天草一揆までの経緯を記した仮名草子『吉利支丹御対治物語』2巻2冊が寛永16年(1639)に刊行された。この書は寛文5年(1665)に『切支丹退治物語』の書名で再板されており、一定の需要があったことが窺える。仮名草子は、僧侶や儒者が執筆に関わり、内容から(1)啓蒙教訓(教義問答、女性向け教訓等)、(2)娯楽(物語、説話等)、(3)実用(見聞記、名所記等)と分類されるが(注2)、『吉利支丹御対治物語』は見聞記・物語・教義問答の要素を兼ね備えている。この作品の「きりしたん」は、怪しく禍々しい外見で、キリスト教の

教えを広めようという魂胆があると描かれる。また、キリスト教の教えを聞く者は、「仏」になると思い定めて受難を積極的に受け入れる「ちゑのなきもの」であるとする。そして、キリスト教の教えを「外道」「魔法」とする。ここに、「魔法」を操る「きりしたん」を「退治」する物語が成立し、テキストと挿絵による「きりしたん」の表象は後の作品に大きな影響を与えた。

寛文6年(1666)刊浄瑠璃正本形式の版本『あまくさがたり』は天草四郎に取材した最初の演劇作品として知られ、後の浄瑠璃・歌舞伎作品に表れるキリシタンの要素は、ここでほぼ出尽くしている(注3)。『傾城島原蛙合戦』(1719)以降幕末に至るまで、15世紀の西国大名、16世紀後半から17世紀以後のキリシタン大名や天草四郎を主人公として、邪宗を信仰し妖術を用いる朝鮮・中国・琉球など異国に縁ある人物が謀反を企てるという物語が度々上演され、謀反人「キリシタン」のイメージを生成・再生・強化した。歌舞伎台帳は出版されず、上演そのものは残らないという演劇メディアの特質がそれを可能にしたと考えられる。

謀反人としての「キリシタン」が登場する演劇作品は、排耶書的性格の仮名草子によって物語化・娯楽化・視覚化された「キリシタン」を「お家騒動」の型に取り込み、近世初頭の東アジア国際情勢を背景とした日本型華夷秩序を物語化・意識化したものである。これらの物語は日本人の周辺諸地域への視線を育て、日本という国の意識を形成する揺籃となっていたと言えよう。

\* 都留文科大学文学部国文学科・教授

注

(注1) 村井章介「[東アジア]と近世日本」(『日本史講座5近世の形成』東京大学出版会、2004)

(注2) 野田寿雄『日本近世小説史仮名草子篇』(勉誠社、1986)、『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店、1993)等。

(注3) 加藤敦子「近世演劇に登場するキリシタン」(『アジア遊学127 キリシタン文化と日欧交流』勉誠出版、2009)